（昭和33年3月18日第三種郵便物認可）

新潟縣公民館月報

昭和40年1月1日（毎月1回1日発行）
発行所　新潟県公民館連絡協議会
〔新潟市一番堀通町・県教育庁社会教育課内〕
〔電話（新潟）㊗5511の624〕
〔振替（新潟）4094〕
発行人　飛田一郎
（定価　1部15円）
1月号（143号）

一九六五年誕生

矢端南天

海はまったく暮れてしまった。
もう人の影もない。
浸蝕されきびしくしまった海の
飛ぶ鳥もなく、沖を走る船もない。
ぽんやり立っている私の前を
一日は一年のように
一年は一日のように
はなれていった。
……とつぜん
暗い沖の方角から
湧き起こる未知の騒
世界の岸辺をあらう波かしら
いま、銀箔わき立ってきた
縞瑪瑙となった六五年の夜明けは
その波々に迎えられた私の心に
ふと、金星が光ったのをみた。

1965

新春随想

小柳耕司（一水会々員）

ピーター君のセーター

樋口弘雄

オリンピックに、日本にやってきた外国の青年二人が、ユースホステルである拙宅に訪れた。

一人は、ネルソンという英国の青年で、機械デザイナー、ヒッチハイクで、日本を一周するのだと元気に語っていた。

もう一人は、ニュージーランドのピーター君といって、二十七才の経理士であった。

このピーター君が来た日は、みぞれの降る寒い夕方で、突然の訪れで、みんな面くらった。第一ことばが通じない。本人は〝アリガトウ〟と〝オハヨウ〟くらいしか知らない。家族五人で、手まねをしたり、辞書を持ち出して、珍妙な英語でやりとりしたり、大騒ぎの三日間であった。

新春を迎え、そのピーター君は、予定からすると、九州をまわっているはずである。

年改まって、今年こそは……新しいアイデアーをと、考えあぐんで考えつかず。わずかに、ヒントを得たのが、年末にやって来た二人の外国青年に接して得た二つのことである。

その一つは、どこへ行っても、汽車に乗るたびに、日本人の団体旅行の多いのに驚いた。「なぜ、社会教育で、楽しい旅行（家族ずれや、友だち同志の）方法を教えてあげないのですか」と言われたことを、もう一つは、ストーブを囲んでワイワイ、話していた時、暖くて上着を脱いだピーター君のセーターの、すばらしさであった。「これは僕がオリンピック見物に東京へ行くことを話したら、母が一カ月半もかかって、編んでくれたセーターだ」と、ほんとに誇らしげに話していた、ニュージーランドの青年の顔である。

有名店で買った、東京で買った品物の誇りをそこにおく、今の日本の青年と、母の手編みを誇るこの外国の青年を考えあわせ、社会教育にたずさわるわれわれの青少年教育の基本理念の中に、考えを直す一面のあることを教えられたことである。（西蒲・巻町公民館長・本会理事）

十年選手とプロ

志水亘

本稿が活字になる頃は、プロ野球スプリング・キャンプの便りが新聞をにぎわしていることであろう。私もわがひいきチームの今年はいかにと、新聞のスポーツ欄に目をやりながら、戦力打診と成績の胸算用を監督に代ってやっていることだと思う。

しかし、考えてみれば、もっとも考えるまでもなく、妻や子どもに冷かされてばかりいるが、おとながボールを投げ、棒で打つなどつまらぬものに独りでオダを上げている図なんてあまり感服できるものではないと思うが、これもファンともなれば、他人の思惑などかまっていられないのが心情というべきであろうか。ともあれ、シーズン前の興味の一つに、今年で十年選手の誰れ彼が、どんな覚悟で今年を乗りきっていくか、それぞれ目標に「打率〇割、打点〇〇、本塁打〇〇本」をかかげてハッスルしている姿は、プロの厳しさを憶えて、ひいき、嫌いのチームをこえて心から声援を送りたくなる。

――閑話休題――

それでは、君の今年の抱負、目標は？とたずねられたら何と答えたらいいものか。

社会教育に身を投じて（否、何となくこの世界に入ったという方が適切かな）十年選手を目前にした今、何を目安にハッスルすべきか。となると、バットで球を叩いたり、球を投げて投げまくるという具合に明確な解答が出てきそうにない。しかし、プロがプロとして通用するためには、見てくれの「資格」でなく、職人的技術が根底にまずあって、その上に知識や何やらが飾りつけられるものであるとすれば、もう一度初心に返って、職人として恥かしくない技術を磨くことに心掛けるとするか。という答が出てきた。

なれば、社会教育主事の持つべき技術とは何か。とこうたた込まれると、これまた、具合が悪いことおびただしい。「ハイ、これこそ、それ也」と取り出してお見せするものも持ち合せていない。

高校に教鞭をとっている口の悪い友人が、こうのたもった。「社会教育は君の性に合ってるゾ」「ウン、ムニャムニャ」と返答はしたが、胸クソの悪いことおびただしい。社会教育は何か調子よくパタパタと仕事をやっているような口調なのである。それに性が合うお前は、大掃除の埃たたきを気持よさそうにやっている男と同じだと言わんばかりである。こんな風に言われてみると、最近の社会教育は家の土台や普請に金がかけられないから、いま住んでいるボロ家を精々気持よく暮すにはどうするかと、無い智恵をしぼりながら掃除に励んでいる姿に見えんこともない。新春早々景気の悪い話になってしまったが、畳たたきまできたんなら、そこでふんばって一流のムチさばきのできる技術に比すべき、司会をうまくやる力と、十分間で自分の意見なり、会合のまとめをはっきり表現できる力を訓練してみることに目標をおくことにした。東洋の魔女の大松監督が、チーム結成の時から、会社が選手やわれわれを甘やかしたなら、今日の栄冠は勝ち得なかったろう……

……とか語ったそうだが、辛く情けない悪条件の中で、プロの技術を高めてゆく努力を新年にあたりケナゲにも決心した次第です。

（新潟市社会教育主事）

県青少年指導者拡充研修会要項の訂正

第三回新潟県青少年指導者拡充研修会要項は（案）の削除を忘れたまま、先ほど、県府市町村長教育長、公民館あて、送付いたしましたが、（案）はとりのぞき、第三回新潟県青少年指導者拡充研修会要項と訂正いたしますのでよろしくお願いいたします。

（県公連事務局）

水に学ぶ

佐野末五郎

※自ら活動して他を動かしむるは水なり
※常におのれの進路を求めて止まざるは水なり
※障害に逢いて激しくその勢力を倍加するは水なり
※自から潔くして他の汚濁を洗い清濁合せ入るる者あるは水なり

公民館のお仕事をお手伝いし色々な機会に色々な人々に接し、社会教育の片鱗を学び得たことは私自身にとってもたいへん仕合わせなことであります。人づくりの重要な仕事に関係しているからには、まず自分自身の魂づくりから始めなければならぬと気付いた時、ふと節記の高階瑠仙禅師のお言葉が脳裡に蘇ってきました。

今の学校教育においては余りに理論的教育法にのみ偏向し過ぎてはいないでしょうか。その目覚ましい学問的進歩は充分認めますが一面何か精進的方面に割り切れぬ物足らなさを感ずるのは私だけでしょうか。ここに私ども社会教育に関係するものが考え、かつ拓くべき一路線があるように思います。まことに禅師の言わる水の如く、自からは強く正しく、大いにファイトを燃やし、他に対しては限りなき隣人愛をもって清濁合わせ呑むほどの大度量をもつ。そういう方向への社会教育もまた楽しからずやと反省するものであります。

最近、大阪で、かって勤務した会社の大先輩と一宿を共にいたしました、その先輩はすでに八十才にもなろうというのに、大いに最新学を論じ、新しく有益なお話をしておられた。明治時代の文科系大学の卒業で、現在は全く第一線から引退されているのですが、日進月歩の時勢に順応するため、老令にもかかわらず発奮し、化学の研究に情熱を傾倒しているわけです。びっくりするとともに私ども後輩のまだまだ勉強の足らざるを痛感し赤面してしまいました。

「一日一生」一日を大事に、たゆみなき勉強を続けてこそ意義ある人生が送れるものと思います。

私自身念々牛歩を怠らぬよう心掛け度く先輩の皆様の一そうの御指導を切にお願いする次第であります。（見附市中央公民館長、本会監事）

アルファベットの夢

古川甫

赤い車。住民に親しまれている移動公民館が、二キロ離れたA部落から、予定任務を終えてもどってきた。降りた老人二人が笑顔をみせて館に入る。入れかわりに、家庭教育学級専任講師C氏と担当主事D君をのせて、赤い車はB分館へとエンジンの音も軽ろやかに出発した。二階の小会議室には連青団長のE氏を中心に幹部会が内容豊かに進行している。隣の集会室には先刻車から降りた人、このみち初段というF氏と碁盤を中にベテランのG氏と対している。作法室の生花クラブ青竹会の若い婦人は今終った定例研修の残務整理、午後から謡曲会の細かい日程をもったH主事が何やら二言三言。すると一段明るいわらい声が流れてきた。応接室ではI社会教育課長を中心にJ当館々長KLMの各公民館長、それに社会教育主事のNO氏何やらむずかしい顔で議論している。新五ヵ年計画の素案の再考らしい。事務室では社会体育専門主事のP君。体育指導員卓球のQ氏、羽球のR氏とともに近日開催の館区内卓球、羽球大会の準備におおわらわである。電話を片手に来月の婦人学級青年学級の講師依頼確認をものなれた言葉でかいで次々にダイヤルしているのは担当主事S君、経理簿とソロバンと青ペンはテイちゃん。さきほどまでにぎやかに階下調理室で中央講師U氏とエプロン姿の御婦人方の中でコマネズミになって活やくしていたT事務員だ。

当市の社会教育ビジョンが実現し、基準以上の公民館が続々と建設され、職員も理想的に配置されている。

この公民館建築に当ってはV高校研究班発表の「雪国における公民館建築様式」を考慮し、かってW紙が発表したマガリカドに追いやられた公民館ではなく、明るい健康陽線の入るX公民館でのことである。……

第三回新潟県青少年指導者拡充研修会要項抜粋

主　催　新潟県公民館連絡協議会
主　管　加茂市公民館
期　日　昭和四十年一月二十日（水）～一月二十一日（木）
会　場　加茂市体育館（加茂駅より徒歩五分）
実状発表　新潟市（都市市街地）加茂市（市街地周辺安塚町（農山村）
シンポジウム　〈テーマ〉社会の変ぼうにともなう青少年教育の問題点
講　師　川井立夫氏（新潟家庭裁判所々長）斎藤和代氏（新潟大学教授）風間忠雄氏（県児童課長）吉田敬氏（加茂市長）
司会者　横山旭三郎（加茂市公民館長）

分科会主題　地域における青少年教育
分科会の構成
第一分科会　市街地関係者
第二分科会　市街地周辺関係者
第三分科会　農山漁村関係者
○助言者　吉川シズ氏（新潟市教育委員会指導主事）
○小木ミサヲ氏（新潟日報広告局調査広報部長代理）
○モスばつみ氏（YWCA新潟グループ委員長）
記念講演赤崎悦夫氏（中央青少年問題協議会事務局長）

しかし。ツララが夜明け前に吹きだした冷たい北風にたえられずガラス窓に当った音に夢はやぶられた。現実はやっぱりすきま風の吹き込む宿直室のセンベイブトンの中での淡く小さな夢だったのだ。今日は10時離れた現実のY部落へ重い映写機械を背負って出かけるのだ。少し早いが熱い朝ガユを作ろう。そしてこの夢を大切にはぐくみながら、若者らしく積雪の坂道へZ旗をうち振って早目に出発しよう。明るい笑顔で迎えてくれる、残り少なくなった青年学級の仲間たちのところへ。

（高田市金谷公民館主事、県主事会常任幹事）

年頭自戒

亀山末松

新春おめでとうございます。社会教育のいすにすわって十六回目の初春を迎えました。馬齢を加えるのみで、めでたいのかどうか、自らも判断しかねるほどで……。

いつ頃からか十二支に動物が模されて年々にそれがまわり、今年は巳年にあたり、いわゆる「蛇」がその印としてあげられている。他の動物は愛らしさとか、吉兆とかで親しまれている面もあるが、蛇は多くはきらわれる立場にあるようである。

（もっとも特別の人はこれを飼育しているとか、薬用にするとかまた、皮など珍重されている面もないではないが……。）

こころみにその例をひろってみることにしよう。曰く「竜頭蛇尾」とか「蛇足」とかのように、形からくるものであろうが、結構でないものの代表格である。さらに「蛇蝎のごとく……」となると嫌悪されるものの双璧となっている。また幼時の記憶をたどると、釈迦ねはんの図絵に「蛇」はいないとの坊さんの話を思い出す――宗教的なの中にあり、大衆と共に歩む立場から特に大切なことであり、自らを戒めて新しいこの年を過したいものと念じている。

（県社会教育主事）

なっているのも一因であろう。年間の新聞紙上に「マムシ猛」などと報道されるのも一再ではない。全くもって不益危険な存在であれば格別に嫌いである。山歩きもこれあるために気が進まない。あの無気味な様相は、コワイもの見たさに眼をむけるくらいであり、青すじが寒くなる感がする。言葉の上でも上等でなく、きらわれるゆえに、人目にとまれば捕殺されることになる。

ここで巳年の新春に思うことは、このような存在になりたくないということである。極く一部少数の者には有用ながら、大多数に背を向けられるような者になりたくない。否ならないようにつとめることが肝心であるということである。社会にある者として、大衆に愛されてこそ自らも幸福であり、安じて他のためにつくすことをなすことができる。かと申していたずらに妥協迎合に終始するということでなくとも、人に好かれ愛されるような人になること。ことに社会教育に従事する場合、大衆の中にあり、大衆と共に歩む立場から特に大切なことであり、自らを戒めて新しいこの年を過したいものと念じている。

（県社会教育主事）

文化財はみんなのもの

その理解と関心を深めるために

日本に生れてよかったと思う心の中には、日本の現代文化の恩恵を享受しているということのほかに、祖先の築いてきた豊かな文化遺産が、現代生活に深みとうるおいを与えてくれていることへの感謝の気持があるからだと思う。

郷土の貴重な文化遺産を再認識するとともに、文化財保護の現状を分析し今後のあり方への指針とするために、ここに県文化財係三氏による紙上討議をお願いした。

文中のA、B、C、三氏は架空の人である。（編集子）

現状を斬る

保存兼公開施設の必要

A　災害が起ったのち、はじめて、文化財保護の手がうたれるというのがわが国の現状だ。これでは文化財の事故が根本的になくなるはずがない。何か基本的考え方にあやまりがあるのではないか。つまり、文化財が国民生活にとって必要欠くべからざるものだという日頃の認識が足りないと思う。文化財の指定、保存、活用等の行政行為を通じて、もっと一般社会に浸透させるべきだ。

B　文化財の公共性が強く唱えられたのは、保護法以来のことで、十四年前までほとんど政府と所有者の間だけのやりとりで、国民はツンボさしきにおかれていた。そういう永い間の因習がのこっているのか、今日でも一般の周知徹底が足りないのは事実だ。

A　本県にどれほど指定文化財があり、その一つ一つにどんな価値があるのか知っている県民とは極めて少ないのではないか、マス・コミなども文化財の事故や災難については、大いに騒ぎ立てるが、日常のPRとなると全く消極的だ。

C　文化財が生活に密着していて、必要が痛感されているものならば、わいわい騒ぎ立てなくても護られるのが当然のはずだ。

A　大体、文化財ということばのもつ内容が多種多様で、その受けとり方が人によってそれぞれちがっており、社会的にはピントがぼけているように思う。ある人は文化財を民族の郷愁といった実体としてとらえ、またある人は学術資料としての価値を見出している。また文化財をもっぱら観光資源の対象として利用する見方もあろう。また教育上具体的なものを通して物事を理解させるということで、すぐれた教材として文化財を活用する考え方もある。

C　個人としては深い関心と理解をもっていても、世論としてまとまらず、バラバラだという感じである。これはやはり重点を定め、ピントをはっきりさせる必要があると思う。

A　百聞は一見にしかず、保存の必要が納得されるためにも、まず実状が多くの人々によく認識されねばならない。美術工芸についていえば、だれでも、いつでも容易に観賞できるような保存兼公開施設―すなわち美術館、博物館が必要なことはいうまでもなかろう。本県には県立のそれらの施設が一つもないという奇現象がながくつづいたが、最近県民会館構想の中に美術博物館が含められることになったが、懸案解決策としてよろこばしい。

無形文化財はいかに保護したらよいか

A　無形文化財に対する理解がおくれている。最近文化財保護委員会のてこ入れで、ようやく少しは目をむける傾向にあるが、指定のしっぱなしというか、何ら保護の手をさしのべていない。もちろん無形文化財といっても、民俗芸能と工芸技術とではとらえ方、活用の仕方も異なってくる。

B　一般には新潟県は、民俗芸能の宝庫と認識されている。しかし、その芸能がどれほど調査され、一般に公開されているのか。そんな状態では、保護のしようにも保護のしようがないと思う。

綾子舞や文弥人形は知っているが、角兵衛獅子なんかはどうなっているか。こうした芸能をなぜ一般に公開しないのか。

A　こんど新潟で農林中金が主催して県指定の民俗芸能が公開されることになっているとか聞いているが。

B　民俗芸能は公開することが即保存に結びつくと思う。その意味で、そんな話があるとすればいいことだと思う。山形県や山梨県では、県主催でどんどんこうした催し物をやっていると聞いている。

A　ただ少し気がかりなのは、公開々々といっても、こうした芸能を伝承している人々になんら助成の手を差しのべないとすれば大いに問題があると思う。彼等は芸能で食っているのではない。それに、神事芸能はショウではないのだからステージにあがること自体が芸能の変形であり、俗化を促進する。

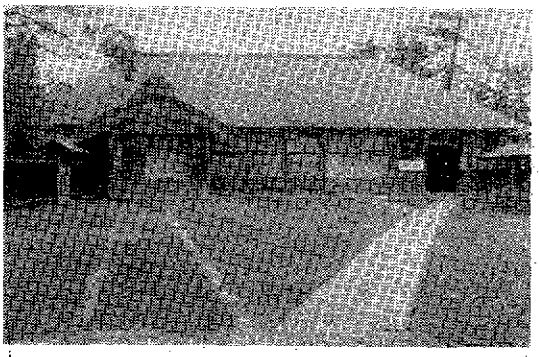
B　観光に結びつくことによってともかく生きのびている芸能もある。佐渡の春駒だって、小獅子舞だってそうだが。

C　ところで、無形文化財では、どこでも後継者養成に苦慮している。小千谷縮なんかは最高令者だけで維持されているが、将来はどうなるのだろう。

A　実際金にならない仕事だから指定されたためかえって困っているところもあると聞いている。

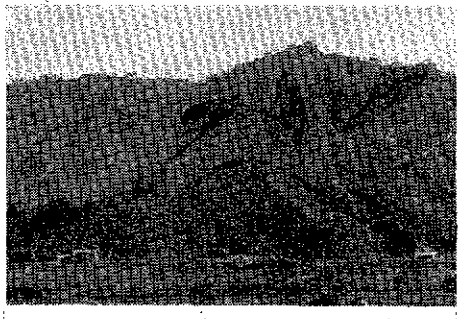
C　何でも金に換算する世の中だから、民俗芸能でも同じことがいわれると思う。最近聞いた話だが若い人たちはどんどん郷里を捨てて県外へ就職、それに若い人たちには芸能をやってもたやるだけで目的がない。

B　仕方がないと思う。老人たちには、信仰という目的があった。それに古いものに対する郷愁めいたものも。



笹川家住宅（西蒲、味方村）

笹川家は江戸初期信州より、当地に来住した旧家。二町歩に及ぶ敷地に広大な邸宅を構え、大庄屋の格式をつたえている。新潟地震で被害をうけたが現在復旧修理中（国重要文化財）



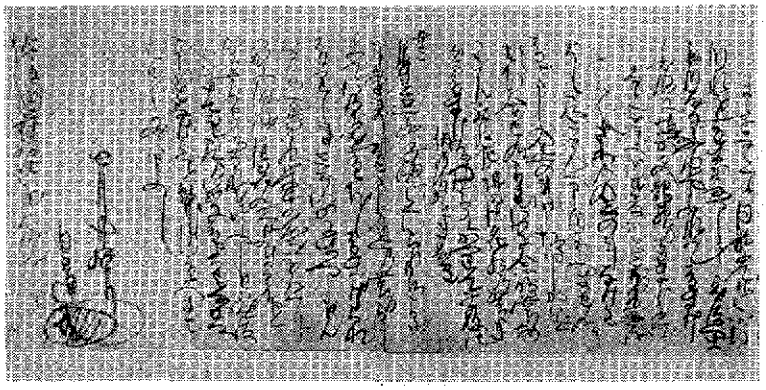
坂戸城跡（南魚六日町）

南北朝～戦国時代上田長尾氏の本拠で最後は上杉氏の番城となった。左手の山懐に居館、山頂一帯に壮大な山城遺構がよく残っている。近年手前の尾根の前端にスキー場がつくられリフトが懸っている。（県史跡）

紙上シンポジウム

文化財保護の

C　何とかいいものは残したい。県も村も、そして村人たちも自分たちの祖先の文化遺産を、子孫に残す義務があると思う。だからあたたかい目で見守りながら、どうしたら保存することができるかということを考えてやらなければならないと思う。



日蓮聖人自筆書状（佐渡、妙宣寺）

日蓮が佐渡配流中、身辺養護につくしてくれた人々に対し、身延帰山後その厚志を謝し、かつ法華経の功徳を説いた消息体の布教書のひとつ。日蓮の信念と気魄がうかがえる。（国重文）

記念物の荒廃にどう対処するか

A　生活の変化で日常生活の一部として伝えて来た民俗資料や民俗芸能は衰滅寸前だが、一方産業構造の変化を背景とした土木ブームによる、史跡名勝天然記念物の大量破壊も目にあまるものがある。

C　全くひどい、スキーブームで上越沿線の山々は赤肌だらけ、古墳群があろうと城跡があろうとおかまいなし、大規模な例では鎧潟干拓工事やゴルフ場設置による縄文から平安時代にかけての広範な遺跡のいん滅、上信越線の複線化、国、県道の改修による破壊があげられる。弥彦の杉並木も国体道路のため根をやられ、大風のたびに附近の住民は避難している。住宅地の開発、学校建設、道路改修農地改良など公共事業の名のもとにすすめられる土木事業の前に文化財関係者はたえずはらはらさせられる現状だ。

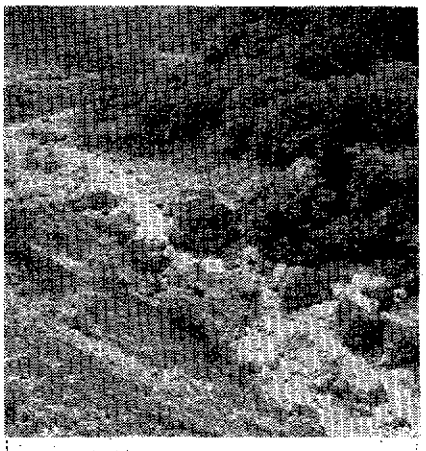
B　狭い土地に何千年間の人間の生活が推積しているのだから、地下は全部これ遺跡といっていいだろう。しかし人間社会はたえず明日を夢みて前進するのだから、なくなる遺跡を惜しむのも限度がある。記録の保存と、出土品の保育だけでいいんじゃないか。

A　それはそうだ。古いものが亡びるのは宿命だが、価値あるものまで滅ぼすのは無茶だ。今日の文化は、過去の文化に根ざして咲き出た花であり、過去を無視して明日の文化の創造は考えられない。郷土の長い歩みをつたえる代表的な記念となるべき史跡は文化財に指定し守り抜かねばならないし、それ以外のものでも出来るかぎり守りたいが止むを得ない場合は破壊前に調査して記録しておく必要がある。

C　最近問題になった直江津市の都市計画事業で危くなった旧国府関係遺跡はいい例だ。都市の拡大で、千年以上の歴史を秘めたまま古代、中世にわたる越後の王都だった地域が一挙に住宅街となるので、関係者は大あわて、何とか代表的遺跡の国分寺地推定地や、府内館地等を守ろうと明春から緊急調査を行なうことになったが、すでに宅地売買も進み、国、県も広大な遺跡地の買上げを敬遠しているので、なり行きが心配だ。近代化したローマの街に古代ローマの一画が保存されているように、都市の歴史を語る記念すべき遺産は、公園などにして残せないものか、国、県も力がなさすぎる。

B　文化財に指定しておきながら維持管理は所有者、管理者まかせ、ことに野外にある記念物に関しては野放し同然だ。石ブームで西頸城の小滝川や青梅川床のヒスイ原産地は漂石あさりが商売に入っているというし、現に今もダイナマイト仕掛けで殴している奴がいるというじゃないか。このために地元では止むなく監視員を頼んでいるが、年千円の手当じゃ、命がけの監視はできかねるわけだ。

A、県教育委員会では一昨年の調査で、県内の遺跡をほとんどマークしてあり、こわれる遺跡の重要度により対処している。しかし、地元の事前連絡がないまま調査もされず、闇から闇へ葬られる場合もあるので、明年は全遺跡リストを市町村はじめ関係先へ配布して協力をもとめる予定だ。



小滝川硬玉産地（糸魚川市）

小滝川の河床に散在する硬玉（ヒスイ）原石。わが国古代文化人がこよなく愛し、身を飾ったヒスイの飾り玉はここに原産した。（国天然記念物）

能生白山神社の舞楽

弓法楽（きゅうほうらく）の一場面。かれんな稚児4人による舞。（県文化財）

文化財を守るものは一体だれだ

C　せち辛い世の中では文化財を金もうけの具にしたり、文化財を屁とも思わない人種も増えた。それ以上に文化財などに心を傾ける余裕のない人々がはるかに多いのではないか。文化財の衰滅をなげく声は多いが、その矢表に立つ人は少なくなった。勇気と忍耐と金が必要だが国も県も、もっと金をかけて実を示すべきではないか。

A　金をかけただけで果して水原の白鳥が人に馴れただろうか。あるいは絶滅寸前のトキが救われただろうか。護り生かそうとする人、そしてそれをバックする物と心が大事なのだ。子供の時代から文化財に親しみ護ろうとする気持を養なっていくこと、教育の中に文化財を盛り込むことが今後の重要な課題だ。

B　文化財を護るものは誰かということになってくるが、文化財は勿論国民みんなが護りつたえるべきものだ。直接には所有者や保存団体がやっているが、もはや個人や保存会、研究家の手には負えなくなって来ている。国家や地方公共団体が推進力となって保護体制を固め、十分な予算を用意してかからねばならぬ。

C　われわれ文化財保護行政にたづさわるものは一段の努力が必要ということだ。

随想

旅人と公民館と

八幡城の瓦

伊藤正一

リュックをゆすり上げて一人降り立った明け方の駅前広場には霧雨がふっていた。しめっぽく煙る畦田の中を一条の道がめざす近江八幡町へつづき、この道を僕は、期待に胸はずませながら元気に歩きはじめた。―

近江八幡町。―琵琶湖にのぞむ美しい町、近江商人のふる里、そして町はずれの山に私がはるかに訪ねようとする古城があった。

八幡城は、豊臣秀吉が彼の全盛時代に、後継者の甥秀次のために天正十八年この町の背後にそびえる八幡山に築いたもので、平時の居館と戦時の要塞が山上、山下でつ連結した戦国末期特有の雄渾な構えをもち、北国街道を制し、湖上の水運を握る京師北門の重鎮だった。やがて秀次の自殺、つづいて秀吉の死により、この城は短かい寿命で廃絶の運命をたどったが、築城史上特記すべき城の一つである。

―眠りからさめかけた町を通り抜けたころから雨がひどくなり、山道にかかるともう本降りとなって、めざす八幡山の頂上は雨雲に包まれてしまった。すっかりぬれそぼれて山麓の八幡神社まで雨宿りに戻った。八幡神社は弥彦神社を思わせる壮厳な古社で、この町の鎮守だ。軒下に佇って玉砂利に打ちつける雨足を呆然とみつめている僕の後から、声をかけて傘をさしかけてくれた人があった。大柄の品のよい老紳士で、朝の出勤途上らしかった。問いかけられるまま私は八幡城訪問のことを話した。「それなら私と一緒にどうぞ。これから行く町の公民館に、城の資料がありますから。」とその人はさそった。町の中央部に街の公民館があった。掃除の行きとどいた明るい事務室に、女性を交えた四、五人の職員が机に向っていた。館長室に招じられた時、僕はまずはじめての紳士が館長さんで、しかもさっき雨宿りをした八幡神社の宮司さんであることを知った。ここの職員で考古研究家のEさんを紹介していただいた。壁一ぱいに格斗する西洋騎馬武者の油絵のかかる応接室で、Eさんは、苦心の研究資料を一杯にひろげて八幡城の説明をしてくれた。城の御殿跡出品の銀の瓦も見せてもらった。豪華な御殿の軒先にかがやいたであろう銀箔塗の瓦は、幾世紀を経ていぶし銀に変じていたが、なお華やかに強い印象は、桃山美人の眉引にも似た艶らしさがあった。

資料を写していると、お茶にそえて皿に盛った芋かんが運ばれてきた。お茶をのみながら、生れてはじめてのぞく公民館なるものに対して、銀行のように落ちつきあるいそがしさの中に、庶民的な明るさ、自由さの交ったゆとりある世界を感じた。隣りの図書館で、郷土誌を読みあさっている中に雨が上った。午後Eさんの案内で八幡山へ登った。爪先上りの急な山道をのぼるにつれて、八幡町は次第に眼下に沈み、頂上が近くなると南江近の山河や、広い海のような琵琶湖が見え出した。

遂に山頂に行った。荒涼たる廃墟であった。いかにも古式を見せる大傾斜の荒々しい石垣が幾重にもめぐり、処々に崩れかけた門跡や櫓台が残り、太丸の天守閣跡はうず高い土の山で建物が崩れ落ちたまま埋れているらしく土を少しほじるといくらでも瓦片がのぞいた。腰までかくれる雑草の中を感動の眼をこらして、幾段の間にけぶる八幡町の情景が鮮明によみがえってくる。ぬれそぼれて現われた引揚者まがいのエトランゼに示してくれた八幡公民館の人々の好意が、ことさらに懐しく思われてならない。はじめてかい間見、僕を感動させた公民館の印象、当時の公民館人は、よほどひまで余裕があって、世話好きだったのだろうか。あるいは公民館人としてありふれた仕事と好意を旅先の神経がオーバーに受取ったのかも知れない。それにしても、何とまたどもかしこもいそがしせちがらくなったものだろう。私を感動させた八幡公民館の人々も、今は、転手古舞をしておられることだろう。（城館研究家・県文化財係）

青年と共に

松本典雄

「親が死に子が死に孫が死に人の家ならせがれに頼らず孫に頼るということもいたしかたがない場合もあり得ると思うが、社会なり国家を考えた場合、一世代をぬきにしてはなりたたないものと思う。

私の地区には本籍地を持つ青年は多くはいない、中学、高校卒の統計をみると、在家庭は約〇・一パーセントである。しかし、島第一の商業地区であり港であるため他の地域からの勤務者や移住者が多く、青年もまた人の家ならせがれに頼らず孫に頼るということもいたしかたがない場合もあり得ると思うが、社会なり国家を考えた場合、一世代をぬきにしてはなりたたないものと思う。

昨年十一月下旬に「両津市青年の集い」が持たれた時、体育グループ、部落青年団、青年学級、サークル等の参加があり、それぞれが「何かを求めて」この「集い」に参加したという異口同音の発言があった。公民館活動が、青年を中心に活発になることこそ望ましい姿だと私は考える。

繁栄しているかにみえる現代社会を、一種の幻影とみつめ、人間性の復活を願い、相寄る孤独の精神を励しあい、不安定な心情を暖めあっている青年たち変貌はげしい社会に押しつぶされないよう、明るく豊かな町づくりのために、頼りにしたいのは、存町の青年たちである。

夜、公民館のストーブを囲んで青年たちと話し込み、夜ふけの十二時過ぎになることが、しばしばある。今年も社会の一隅でこれらの青年と力を出しあい手を取りあって行きたいものである。（両津市立中央公民館主事）

奥只見の秋

内藤省三

① 塩沢公民館

過日中頸公連主催の研修旅行に参加した。一行十二名。十一時半塩沢着。冬季間二米の豪雪に埋れて喜す田舎町、家造りもガッチリしている。街角で昼食後直ちに公民館を訪れる。小学校々庭を囲んで中学校、役場、公民館、保健所、研修所と建ち並びちょっとした文化センターである。この上病院と火葬場があればここで一切間に合うのだが等と笑い合う。

さてここの公民館は図書活動で有名。図書室は明るく静かな環境で館長さんより館の運営方針や実情を聞き、主事さんから図書活動の苦心談を拝聴する。本年度の重点目標は

◎読書グループの育成強化、ということで、各部落単位にグループをおき、巡回箱に詰めて自動車にて配本して行き一カ月毎に交換する。その数三千。各部落に責任者をおいて世話をする。台帳とカード処理法。大体わが町と大同小異である。

冬季間は日を決めて部落から取りにくるとのこと。これがなかなか大変なことだと思う。

② 雲洞庵、牧之記念館

ことを辞して主事さんから案内をいただき雲洞庵を訪れる。さわやかな秋気満つる中にその奥床しい歴史を秘めてヒッソリと建つ風雅な伽藍、何か一句ものしたいほどである。続いて有名な鈴木牧之記念館に入る。数々の遺品特に「北越雪譜」の原本を見て、その苦心その根気とに驚嘆する。古人の偉大さに打たれてか表へ出たときはホッとする。塩沢より汽車で小出に至り、さらにバスにて大湯に向う。小出は奥只見ダムの建設基地なりしところ。電源ブームの面影を残しチャチな食堂、バー等がやたらに目につく。

バスは湯治客の婦人団体と同乗してにぎやか。舗装道路を揺るがごとく走ること二十分で大湯着。平凡な山奥の湯宿、村と廃に落着く。清流に臨み窓よりの展望、前山一面を切り開いてスキー場とし、頂上まで新しい登山路が続きリフトが空しく廻っている。

③ ダムに驚嘆

本日も快晴、午前七時電源開発バスにてダム見学に出発。湯之谷第二中学佐藤校長さんの御案内、氏は当地出身で開発当初より土地提供、校舎建設、観光宣伝等に全力を注がれ「奥只見の主」といわれる実力者。数億の巨費を投じた完全舗装道路を快適に走る。

●山深しここ奥只見いま紅葉

隧道延長実に十八粁、中間バス二台並行して走行可也。中間処々に間道に通ずる抜穴あり。走れども走れども果無き感し、通算十二分を要して漸くダム側に出る。このトンネル工事費は約三十七億円とのこと。トンネルを出たとたん大ダムの壮観目前に迫る。

●連山の紅葉に埋れダム毅然

折から湖は満水、全山の紅葉の錦、遙か下方を蛇行する只見川の清流、遠方の丘上に点在するビルも周辺の大渓谷美に溶け込み、大自然のパノラマ。

●日章旗紅葉に映えてダム高し

専用エレベーターにて地下に降りる。堤防の巾上部三十五米、底部二三五米この内部に十二階の発電所あり。特に許され最下層の発電室まで行く。モーター、ピストン部技術員わずか三名とのこと。地下全体の従業員も十数名、総てオートコントロールシステムの由。

地下道の両側各階共地下水がコンコンと流れ、地上とは総てスピーカーにて連絡、整然として実に清潔。しかしこの大工事の陰に一〇三名の犠牲者が出た。事務員の案内にて、各階をまわり再びエレベーターで地上に出る。昇降感が全くない。

見晴台上の岡田正平翁記念碑前で記念撮影。小憩の後、遊覧船にて湖上一周すみきった秋の水、赤、黄、緑が織りなす山々の錦。湖面にそそりたつ奇岩怪石からむツタ、悠々と郡遊するベニマス。……

●満山の紅葉照り映え湖眠る

佐藤先生の案内で、社員クラブに入り、ここで中食。常時五千人を携る社宅、食堂完備。ここよりはダム風景一望。午後三時、佐藤校長に厚く礼をのべて帰路につく。小出駅につくころは降雨。まったく、めぐまれた研修旅行だった。

（中頸・吉川町公民館主事）

新しい年に

内山嘉雄

公民館関係者は、年が新らしくなるからということでなく、毎日を新たな気持ちで仕事に打ちこみ壁につき当っては苦悩し、それを打開するために、エネルギーを使い果す毎日を送っているものと思うが、効率的なエネルギーの消費という点では、いくつかあげることができると思う。

第一に、公民館職員は県段階において課題解決のために、定例的な研究集会をもつ機会がほとんどなかったが、これからはぜひ計画して、お互いのアイデアと実践発表を素材に大いに討議し、合理的なエネルギー消費のために資することを考える必要がある。

第二に、公民館という殻の中にとじこもらず、あらゆる方面と結びついて協力しあい、力を分担しあってゆくことである。

× ×

公民館は、本来総合的な社会教育施設であり、その活動や方向が他の社会教育施設と異り一定の限界がないのがその特性である。

ところが、法律が整備されるにしたがい、公民館人の考え方がややもすると「お役所的」であったり「形式的」になったりまた、教育の一端を分掌するという立場を定型的に解決することから、学校教育の方式をまねする姿勢が強く見られはしないだろうか。

近年総合社会教育ということがいわれるようになったが、いまだにその論理的解決が統一されていないのが現状のようである。

この辺で、いま一度昭和二十一年七月五日に出された文部次官通牒に目を通して、公民館創始の構想を味わってみる必要があるように思う。

人間社会にあるものは「具体的な生活」であり、教育だけをひき出して、蒸留水的な教育をやっても、今日の生活にどれほど力になるであろうか。（学校教育は別）

多くの住民は、今日の生活をどうしたらよいかということにエネルギーをすりへらしているのである。

公民館活動は「住民のしあわせ」ということに焦点を合わせることによって、広い視野に立って無限の活動を展開する必要がある。

いわば、新しい年の心構えである。（小千谷市公民館主事）

十年選手

徳間助夫

昭和四十年、私は四十才の誕生日を迎える。ひとりの人間が、人生に確固不抜のものを打ち立てる年でもあるといわれているが、今の私にはその土台の材料すらどこにも見当らない。

昭和四十年、それはまた、私が公民館職員になって満十年になる年でもある。

プロ野球なみにいうと十年選手。われらの県公連では、十年選手は優良職員ということで、ささやかな記念品と印刷した表彰状をくれるということだ。しかし、とても十年選手、優良職員なんてもんではない。〝予算が少ない、施設が貧弱だ、月給が安い〟と、この十年ケチをつけることだけが一人前になっただけなのではないだろうか。

わが十年の歩みはこれだ〟と、マナ板の上にのせるようなものがあるか。ない。これではまるっきり自己主張しかできない中学生と変らない。まったくお粗末至極な十年だ。〝人間四十にもなったら一人前の仕事をしなければならん〟と、先ばいにいわれるまでもなく、こいらで大いにワサビをきかさねばと考える。

一年にひとつぐらいマナ板の上にのせるような納得のいく仕事、一人前の仕事がしたいものだと、つくづく思う。

そしてその仕事をとおしてわが人生の不抜の土台を築きたいとも思う。先ばい同僚各位のご健斗を祈り、あわせてわが健斗も培いたい。（柏崎市中央公民館主事、本紙編集委員）

ことば三昧

人の子の親ともなれば、だれしも自分の子の名付けには苦慮することであろう。名前の変遷は世相を反映しておもしろい。

周囲の女子の氏名をみると、「何子」と「子」のつく名前の多いのに気付くであろう。一体この「子」はいつ、またどんな階級につけられたものであろうか。一々文献にあたらないのではっきりしたことはいえないがおそらく平安期のころではなかっただろうか、影の立役者として権政をほしいままにした女傑北条政子にはもう「子」がついている。平安から室町期にいたる庶民資料には女にはほとんど名前がつけられていないので、検討する余地もないが、江戸期の文学に現われる女性をみると「お七」だの「おさん」だのと「お」のつく名前が多い。

「お」から「子」へ

大正期に東京下町の某小学校で女子の氏名を調べたところが約四百名の児童のうち、「子」のついていた児童がわずか一名といわれている。その一名も親が官吏だったとか。

かくて、高位顕官専用の「子」も時代とともに成り下り、いまや「お」にかわり庶民のものに定着したということができる。しかし、これもまた、やがてヨーロッパ文化の影響によりやがて消え失せてしまうものではなかろうか。（Q）

北海道①

庵原健

つゆおびし白光に光るうろこ雲北はゆきつつ心さやかなり
季節は初秋山色すでに枯れがれて阿寒の山は去にがてぬもよ
水底のマリモとほして阿寒湖のヤイサマネナに原始を偲かむ
阿寒・美幌の秋尋め来つれ美しくにほふ野萩はさらさらに見ず
阿寒野や草食み足りて馬は仔馬牛は仔牛をともなひあそぶ
四方ひろき見はらし峠背も耳も眼とし化すらし美幌に佇てば
煙噴くマチネシリに対しおし黙り聳え晴れたり大きピンネシリ
とほにわが記憶に生きむ大毛蟹三つくらひし美幌の夕食
みづうみに影ぼうつさず摩周嶽ビリカに呀えて天にうそぶく
摩周湖は怪にみどりの水たたえものをうつさず人近づけず
垂直高二百の絶壁あふき見れはいたたきの老樹天を刺したり
（層雲峡）
アイヌ女の鐫のおどりよ羽根ふりていのちはうららころころと鳴く
（羽茂町々長・前本会理事）

バスのなかで

与志登士

十月のある日、高田へのバスの中のことである。晴れた秋空のもと頸城三山がくっきりと稜線を描いて美しい日であった。

稲田三丁目で、三才位の坊やが母親に連れられて乗車し、腰をおろした母親のひざにちょこんと乗った坊やの手には、いくらかのお金がにぎられていた。

「坊や、どこまで」、とやさしく問いかけて、パンチを入れた切符がでて自然に坊やに渡され、ニッコリと二人の間で交されたほほえみ、ことばだけだけであるだが私には、この小さな行為の中に潜む深い教育的意義を思わずにはいられないことだった。それは坊やに対して口から大人の中に認められたという誇りと自信を、無言のうちにしっかりと植えつけるに足る高い教育技術であると確信するからである。

× × ×

私にはこの車掌さんの未来に限りない幸福が待っているような、そしてこの人こそ幸福な生活の中に生きる資格を充分身につけている人のように思えて心温まるしばらくの時を過しだことだった。

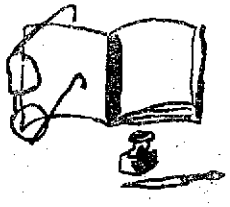
（安塚町公民館報）より

初稽古

鶴巻新一路

初御空光うつし合う公民館
初日うけ微笑飛し合う主事家族
初稽古総身竹刀に集め打つ
確と立つ少年剣士初稽古
双手突き沿さがつくる公民館
（南蒲田上村公民館主事）

あとがき



新年ならしいものにするためにいろいろ手をつくしてみました。まず「文化財保護の現状を斬る」と題して県文化財係三氏から紙上シンポジウムを展開していただいたものを特集とし公民館人からは随想をあつめてなんとかまとめてみました。

× × ×

炎禍よりよみがえりたる昭和大橋の朱ぬりのらんかん日に温みぬつ　（本）